



'松がつなぐあした'

## 名取オイスカ支援 クロマツ37万本植樹

主にアジア太平洋地域の開発途上国で植林活動を手掛けてきたオイスカが、林野庁に海岸林再生の協力を申し出たのは2011年3月17日。震災の6日後だった。発案者は現海岸林担当部長の吉田俊通さん。海岸林造林の経験はなかつたが、津波や潮害、飛砂などの自然災害から人々の命と暮らしを

守るインフラを取り戻さなければならぬという思いに駆り立てられ、組織や行政を動かした。

### 苗木作りから

同年5月、名取市避難所を訪ね、被災した人々にプロジェクトの概要を説明した。「仕事として苗木作りを手伝ってほしい」「活動費は寄せ集めて賄う」…。突如現れた名前も知らない団体に不信感をあらわにしてビデオカメラを回す人もいる中、仙台空港近くの北塙地区で代々暮らしてきた3人が協力すると決断した。

「松林を再生してかつての故郷

東日本大震災から10年たち、津波に直撃された名取市沿岸にクロマツの緑の帯がよみがえってきた。公益財団法人「オイスカ」(東京)が被災した地元農家や市民らと共に苗木を育て、植栽した。海岸林の再生は本来、行政が担う公共事業で、民間団体が約100万もの規模を一手に引き受けるのは極めてまれ。日本経済新聞社元論説委員でオイスカアドバイザーの小林省太さんが、プロジェクトの歩みや地域の歴史を「松がつなぐあした」(愛育出版、1430円)にまとめた。

## 元記者が記録 故郷の歴史も伝える

を取り戻したい」。海岸林に守られて農業を営み、クロマツの落ち葉を燃料にするなど恩恵を肌で感じていた被災者有志が翌年、「名取市海岸林再生の会」を結成。宮城県農林種苗農協に加盟して種から苗木作りを始めた。

吉田さんは、壊滅した現地の視察ツアーへや東京でのシンポジウム開催などを通じて寄付を呼び掛けた。14年4月から苗木の植え付けが始まる、下草刈りや排水路整

10年  
東日本  
大震災

# 海岸林再生の歩み 後世に

備をするボランティアを募集。地元の名取北高や首都圏、関西の企業・団体が定期的に参加するようになり、延べ1万1千人超が参加する活動に発展した。

昨年秋に全ての植栽を終え、計

**若い世代左右**

記者時代から10年にわたりプロ

(生活文化部・足立裕子)

約37万本を植えた。高さ4、5メートル伸びた松林ではタヌキやキツネ、ハヤブサなど多様な動植物の生息が確認されている。今後は間伐して本数を減らし、20年後、30

年後に防災林の役目を果たす丈夫なクロマツを育てていくことが課題となる。

次に取材を重ね、故郷の歴史や思い出、震災時の避難行動なども伝えていくことが、数十年先の松林の姿を左右すると指摘する。市沿岸部の北塙、閑上地区で被災した人々に取材を重ね、故郷の歴史や思



①植え付け開始から1年後の植栽地。クロマツの苗木が点々と並ぶ=2015年5月②クロマツの緑が連なる名取市沿岸部=2020年9月(いずれもオイスカ提供)

